

## 壁塗り代換は体系的な文法現象である

—山田昌裕(2004)「壁塗り代換 (spray paint hypallage)

—文法現象の存在をめぐる—」への反論として—

川野 靖子

### 【キーワード】

格体制の交替、locative alternation、位置変化、状態変化、同義

### 【要旨】

本稿では、日本語に壁塗り代換は存在しない（従来壁塗り代換とされてきたものは体系的な文法現象ではない）と主張する山田(2004)を検討し、その問題点を指摘した。具体的には、壁塗り代換という現象について基本的なレベルでの誤解があること、先行研究の理解に問題があること、山田(2004)の挙げている根拠はいずれも壁塗り代換が体系的な文法現象であることを否定する根拠にはならないことを述べた。その上で、「壁塗り代換はやはり体系的な文法現象である」という見解を示した。

### 1. はじめに

本稿は、日本語に壁塗り代換は存在しない（従来壁塗り代換とされてきたものは体系的な文法現象ではない）と主張する山田(2004)を取り上げ、その問題点を指摘する。その上で、「壁塗り代換は、やはり体系的な文法現象である（すなわち、一定の仕組みによって成立している現象である）」という見解を示す。

壁塗り代換とは、次の(1)や(2)のように、「塗る」や「満たす」等の一定の範囲の動詞が～ニ～ヲ形と～ヲ～デ形の二種類の格体制をとり、しかも両文がよく似た意味になるという現象を指す<sup>1</sup>。

(1)a. 壁にペンキを塗る

b. 壁をペンキで塗る

---

<sup>1</sup> 自動詞の場合は、「グラスに水が満ちる」「グラスが水で満ちる」のように、～ニ～ガ形と～ガ～デ形の交替になる。

(2)a. グラスに水を満たす

b. グラスを水で満たす

壁塗り代換についてはこれまで、「～ニ～ヲ形と～ヲ～デ形は同じ意味を表すように見えるが本当にそうなのか」、「違うとしたら、それぞれどのような意味を表すのか」、「壁塗り代換を起こす動詞の条件は何か」、「なぜそのような条件の下でこのような現象が起こるのか」等のことが研究されてきた（奥田 1976、Kageyama1980、奥津 1981、Fukui et al 1985、定延 1993、川野 1997・2001・2002・2004・2006・2009・2013、岸本 2001、井島 2005、Iwata2008 等）。関心のありかやアプローチは研究者によって異なるが、いずれの場合も、壁塗り代換を文法現象として（すなわち、何らかの仕組みを持つ現象として）認識している（したがって研究の対象としている）点は同じである。

これに対し山田(2004)は、「体系的な文法現象として代換（引用者注：壁塗り代換を指す）というものはない（p.17）」と主張するものであり、この点で上記の諸研究とは根本的に立場が異なる。山田(2004)の主張は次のようなものである。

- ①従来の研究では「壁にペンキを塗る」と「壁をペンキで塗る」を同義としているが、実際には同義ではない。同義でなければ「代換」とは認められない。意味の異なる二つの文に、たまたま同じ名詞が使われているにすぎない。
- ②壁塗り代換を起こすとされる動詞でも、例文によっては代換が成立しない場合がある（\*空きっ腹に水を満たす／空きっ腹を水で満たす）。また、壁塗り代換を起こすとされている動詞でなくても、壁塗り代換のような現象が起こる場合がある（エッセーに自分の体験を書く／自分の体験でエッセーを書く）。したがって「壁塗り代換を起こす動詞」という動詞群は存在しないことになる。
- ③「離島の人々にテレビ番組を放送する」「離島の人々をテレビ番組で放送する」が代換とは認められないのだから、「壁にペンキを塗る」「壁をペンキで塗る」も代換とはいえない。
- ④壁塗り代換といわれている現象は、～ニ～ヲ構文と～ヲ～デ構文それぞれの成立条件の問題へと解消される。

しかし、上記①については先行研究の理解に問題があり、加えて、「同義でない」という指摘は壁塗り代換が体系的な文法現象であることを否定する根拠にはならないと考えられる。また②と③については、壁塗り代換という現象に対して、基本的なレベルでの誤解があると思われる。

さらに④については、実際の言語事実に照らしてみれば、このような見解が成り立たないことは明白である。本稿では、上記①～④の主張がいずれも成り立たないことを示し、その上で、壁塗り代換は一定の仕組みによって成立している文法現象であるという見解を述べる。

壁塗り代換は既に多くの研究で文法現象として取り上げられており、したがって、「壁塗り代換はやはり文法現象である」という本稿の見解自体は大きな新規性を持つものではない。しかし壁塗り代換を議論する際に山田(2004)のような批判が出ることもないわけではない。これは、壁塗り代換がどのような点で文法現象であるといえるのかについて、これまで明示的に述べられてこなかったことが原因だと思われる。したがって、山田(2004)の批判を検討し、壁塗り代換を体系的な文法現象であるとする立場がどのような考えに基づいているのかを改めて確認することには、一定の意義があると思われる。

以下の2節～5節で上記①～④を順に検討していく。

## 2. 同義でないから代換ではないという主張について

### 2-1 山田(2004)の主張の整理と妥当性の検討

上で述べたように、山田(2004)の主張①については先行研究の理解に問題があり、そのことが山田(2004)の主張を分かりにくいものになっている。そこで、まずこの点を整理し、その上で主張①の妥当性を検討する。

壁塗り代換の～ニ～ヲ形と～ヲ～デ形について山田(2004)は、従来の研究では同義と仮定しているが、実際には文意が異なるとする（「壁にペンキを塗る」では壁の一部を塗るのでも構わないのに対し「壁をペンキで塗る」では壁全体が塗られるという意味合いが強い、と述べている）。そして、「そもそも二つの文が同義でなければ、それぞれの文がそれぞれの現実事象と対応しており、そのため異なる格構造を持っているとも考えられる(p.18)」「表層に現れた名詞句がたまたま一致しただけであり、見た目には格の交替があるように見えるが、それを代換という文法現象とみなすことは事の本質にはならない (p.20)」と主張している。

しかし、先行研究は同義としているという山田(2004)の理解には問題があり、実は従来の研究でも壁塗り代換の～ニ～ヲ形と～ヲ～デ形を同義とは考えていない。奥田(1976)や奥津(1981)以来、川野(1997・2001・2002・2004・2006・2009・2013)や岸本(2001)、井島(2005)等の最近の研究に至るまで、～ニ～ヲ形は位置変化を表し～ヲ～デ形は状態変化を表すと考えられているのである（「壁にペンキを塗る」と「壁をペンキで塗る」を例にとると、前者はペンキを移動させることを表す文であり、

後者は壁の様子を変化させることを表す文だ、ということである)<sup>2</sup>。本稿の考えもこれらと同じである。～ニ～ヲ形と～ヲ～デ形は格体制が異なるのであるから、意味が異なると考えるのは自然なことだろう。つまり、(意味の違いを「全体的か否か」と見るか「位置変化か状態変化か」と見るかという違いはあるものの) 壁塗り代換の～ニ～ヲ形と～ヲ～デ形は意味が異なると考える点では、山田(2004)も本稿及び奥田(1976)等の先行研究も同じなのである。

一方で、本稿(及び、以下で言及する奥田 1976 や井島 2005 等の先行研究)と山田(2004)の間には、決定的な相違点もある。この相違点を理解するには、「現実世界の出来事」と「言語が表す出来事の類型」を区別することが重要になる。

「入れる」「付ける」「置く」等の動詞は、それぞれ現実世界の異なる出来事を指示しているが、「どこどこニ 何々ヲ 入れる/付ける/置く」のように、同じ格体制をとる。これは、日本語において、「入れる」「付ける」「置く」等の表す出来事が同じ類型の出来事として(具体的には「位置変化」として)みなされているからである。このことは、「現実世界の出来事」と「言語が表す出来事の類型」が異なるレベルのものであり、両者を区別して考える必要があることを示している。

以上のことを踏まえた上で、本稿は、ある現実の出来事を位置変化として類型化しているのが「壁にペンキを塗る」であり、同じ現実の出来事を「状態変化」として類型化しているのが「壁をペンキで塗る」であると考え。このような捉え方は、次に引用するように奥田(1976)にも示されている。

表現される現実がひとしいということは、その連語の内部構造の同一性を意味しはしない。前者(引用者注:「くちびるにべにをぬる」を指す)がとりつけの構造であるとすれば、後者(引用者注:「べににくちびるをぬる」を指す)はもようがえの構造である。(中略)

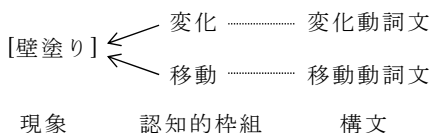
連語の内部構造のちがいは、現実のきりとり方のちがひ、きりとってきた現実の側面の強調を意味する。おなじ現実は言語のがわからことなる風に意味づけられて、それらのうちからひとつを選択することは、はなし手にゆだねられている。(奥田 1976:9)

---

<sup>2</sup> なお、用語は研究者によって異なり、奥田(1976)は「とりつけ」と「もようがえ」、奥津(1981)は「移動」と「変化」という用語を用いている。本稿では引用等を除き「位置変化」と「状態変化」に統一して用いる。

また井島(2005)にも同様の見解がみられる。以下に引用する。

(略) 人間が外界の現象を認知するには、限られた数の認知の枠組というものが前もって用意されており、それを現象に当てはめて現象を類型化することによってどのような種類の現象であるかを理解するものと考えられる。もちろん、現象によって当てはめやすい枠組というものがあると思われ、典型的な場合には一つに限られるだろうが、「壁塗り」のような場合は、<変化>の枠組も<移動>の枠組もどちらも当てはめ可能な中間的な現象であるのであろう。



(井島 2005:68)<sup>3</sup>

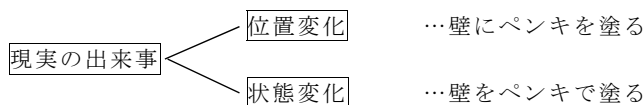
つまり、壁塗り代換とは「現実世界の同じ出来事が言語において二通りに類型化される」という仕組みで成立する言語現象だ、というのが本稿（及び奥田 1976 や井島 2005 等）の考え方である<sup>4</sup>。

これに対し、山田(2004)は「現実世界」と「言語の意味の世界」を区別して考えているのか（山田 2004 のいう「文意」が現実世界の出来事を指しているのか、言語の意味の世界のことを指しているのか）ははっきりしない。しかし、「現実世界において全体的に塗る場合と部分的に塗る場合が存在し、それぞれの現実事象と「壁をペンキで塗る」「壁にペンキを塗る」が対応している（山田 2004:18）」等の記述から、いずれにしても、（言語の意味の世界だけでなく）現実世界でも別の出来事と考えている点は確かであり、その点が本稿（及び奥田 1976 や井島 2005 等）と決定的に異なる。この違いを図にすると次のようになるだろう。

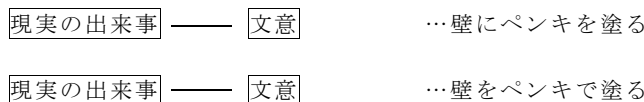
<sup>3</sup> 井島(2005)のいう「現象」（「外界の現象」）は、本稿における「現実世界の出来事」に相当すると考えられる。

<sup>4</sup> 奥津(1981)は壁塗り代換の～ニ～ヲ形と～ヲ～デ形の類型的意味が異なること（前者は「移動」を表し後者は「変化」を表すこと）を明示的に指摘した重要な研究であるが、一方で「知的意味は同じである」と述べている。この「知的意味」が何を指すのかは明らかでないが、仮に「現実世界の出来事」を指しているのだとすれば、壁塗り代換を本稿（及び奥田 1976 や井島 2005）と同じように捉えていることになる。

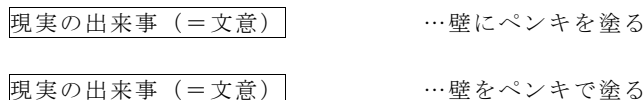
### (3)本稿等の考え方



### (4)山田(2004)の考え方



あるいは、



この違いが、壁塗り代換を体系的な文法現象とみるか偶然とみるかの分岐点になる。すなわち、本稿等では壁塗り代換を一定の仕組みで（同じ現実の出来事が言語において二通りに類型化されるという仕組みで）成立する現象とみるのに対し、山田(2004)では壁塗り代換は何らかの仕組みを持つ現象ではなく、現実世界でも意味の世界でも別の出来事を表す互いに無関係の文でたまたま同じ名詞が使われ、たまたま似た意味の文になったにすぎない、とみることになる。

以上の整理を踏まえて、改めて山田(2004)の主張①を検討してみたい。主張①で山田(2004)は、「同義でない」ことを「代換ではない（体系的な文法現象ではない）」ことの根拠としている。しかし、本稿等の(3)の見解でも「壁にペンキを塗る」と「壁をペンキで塗る」を同義と考える点は同じである。したがって「同義でない」ことは壁塗り代換が体系的な文法現象であることを否定する根拠にはならないといえる。

「壁塗り代換といわれてきたものは体系的な文法現象ではない」と主張するのであれば、上記(3)のような考え方が成り立たないことを示す必要があるが、山田(2004)はこの点について何も議論していない。したがって、壁塗り代換は体系的な文法現象であるとする従来の見解を崩したことにはならないといえる。

## 2-2 文意の違いの検討

2-1 で述べたように、山田(2004)も本稿（及びその他の先行研究）も「壁にペンキを塗る」と「壁をペンキで塗る」を同義と考えない点は共通する。しかし、意味の違いを「全体的か否かの違い」とみるか「位置変化と状態変化の違い」とみるかが異なる。そこでこの 2-2 では、山田(2004)の主張①の検討の補足として、どちらの見方が言語を記述する上で本質的なのかを検討したい。

山田(2004)は、「壁にペンキを塗る」では壁の一部を塗るのでも構わないのに対し「壁をペンキで塗る」では壁全体を塗るという意味合いが強くなるとした上で、その文意の違いに対応して格表示の仕方が変わってくると述べる (p.18-19)。しかしこの見解には次のような問題がある。

一つは、「全体的か否か」は文脈や一般的知識からの推論により生じる意味（すなわち語用論的意味）であり、「塗る」という動詞そのものが表す意味ではないという点である。山田(2004)自身が「そもそも唇を塗る場合に、現実世界の事象として唇のある部分だけに口紅を付着させることは一般的にあり得ず、したがって「唇にルージュを塗る」にせよ「唇をルージュで塗る」にせよ、それは唇全体にルージュを付着させるという解釈にならざるを得ない(p.18)」と述べているように、部分的、あるいは全体的と解釈されるかどうかは、文脈や一般的知識によって変わってくる。つまり、「塗る」という動詞自体が部分的か全体的かを表すわけではないのである。そのような、動詞自体の意味ではないものが、その動詞の格体制（山田 2004 の言い方では「格表示の仕方」）を決めるとは考えにくい。

もう一つの問題は、仮に～ニ～ヲ形をとる「塗る」がその動詞自体の意味として「部分的でも構わない」ことを表すとしても、同じ格体制をとる他の動詞に同じ意味特徴が見られなければ、それは「(～ニ～ヲ)塗る」の個別的な意味にすぎず、格体制の決定に関わる類型的意味とはいえないという点である<sup>5</sup>。この点について実際の動詞で確認してみると、

<sup>5</sup> ここで、「類型的意味」と「個別的意味」について整理しておきたい。動詞が表す意味（語用論の意味ではなく、その動詞自体が表す意味）は、類型的意味と個別的意味で構成されると考えられる。類型的意味とは、同じ文法的ふるまいをする動詞が共通して表す意味のタイプのことであり、一方、個別的意味とは、個々の動詞を特徴づける、他の動詞とは異なる意味特徴を指す。たとえば「入れる」「付ける」「置く」等の動詞は、「位置変化」という同じ類型的意味を持ち、格体制に関して同じ文法的ふるまいをみせる（いずれも「着点ニ対象ヲ」という格体制をとる）。一方で、これらの動詞は、位置変化のさせ方等に関して、それぞれ異なる指定を持っている（「入れる」には「入れる」の、「付ける」には「付ける」の位置変化のさせ方がある）。これが個別的意味である。

たとえば「グラスに水を満たす」ではグラス全体に水が入っていることになり、部分的解釈を許さない。したがって、部分的か全体的かで～ニ～ヲ形をとるかどうかが決まるのではないことになる。(なお、「満たす」は「グラスを水で満たす」のように～ヲ～デ形もとるが、この場合も全体的解釈になる。このことから、「全体的か否か」で格体制が変わるのではないことがわかる)。

以上のことから、「全体的か否か」は、「壁にペンキを塗る」と「壁をペンキで塗る」の格体制の違いを反映するような本質的な違いではないといえる。

これに対し、「位置変化」や「状態変化」は、文脈等に依存しない、動詞自体が表す意味であり、かつ、同じ格体制をとる動詞が共通して表す類型的意味である(たとえば「壁にペンキを塗る」と同じ格体制をとる動詞には「胸にバッジを付ける」「グラスに水を入れる」等があるが、これらは位置変化動詞である。また「壁をペンキで塗る」と同じ格体制をとる動詞には「服を泥で汚す」「塩水を水で薄める」等があるが、これらは状態変化動詞である)。すなわち、「壁にペンキを塗る」と「壁をペンキで塗る」の意味の違いとして本質的なのは、「位置変化か状態変化か」であると考えられる<sup>6</sup>。

### 3. 代換動詞という動詞群は存在しないという主張について

続いて本節では、山田(2004)の主張②を検討する。山田(2004)は壁塗り代換を起こすとされる動詞群は存在しないと主張しているが、1節でも述べたように、ここには「壁塗り代換を起こす動詞とは何か」について基本的なレベルでの誤解があるように思われる。

次の例が示す通り、「塗る」のように壁塗り代換を起こす動詞もあれば、「汚す」のように壁塗り代換を起こさない動詞もある。

---

個別的意味は、類型的意味とは異なり、動詞の文法的ふるまいには関わらない。

なお、本稿における「類型的意味」は、奥田(1976)の「カテゴリーカルな意味」や仁田(1997)の「範疇的語義」に相当する。

<sup>6</sup> 「全体的か否か」は、「位置変化か状態変化か」に付随して出てくる語用論的解釈だと考えられる。すなわち、「壁をペンキで塗る」は壁の状態変化を表すので「壁全体が塗られる」という解釈になりやすく、一方、「壁にペンキを塗る」はペンキの位置変化を表す文であり、壁がどうなるかを述べる文ではないので、壁全体かどうか問われない、ということなのだと考えられる。なお、岸本(2001)にもこれと同趣旨のこと(部分的解釈や全体的解釈は語用論的要素に影響され、常に生じるわけではないことや、位置変化と状態変化の違いに起因するものであること等)が述べられている。



- (5)a. 壁にペンキを塗る      b. 壁をペンキで塗る      (=1)  
 (6)a. \*壁にペンキを汚す      b. 壁をペンキで汚す

したがって壁塗り代換の研究では、壁塗り代換を起こす動詞と起こさない動詞の違いを明らかにすることが重要な研究課題になるのだが、ここで気をつけなければならないことは、次の(7)の点である。

- (7)a. 「壁塗り代換を起こす動詞」とは、使用される名詞や文脈等が適切でありさえすれば代換が成り立つ動詞のことであり、  
 b. 「壁塗り代換を起こさない動詞」とは、名詞や文脈等の環境にかかわらず、そもそも～ニ～ヲ（あるいは～ヲ～デ）という格体制をとれない動詞のことである。

たとえば、「塗る」は(5)のように「壁にペンキを塗る」とも「壁をペンキで塗る」とも言えるので、「壁塗り代換を起こす動詞」に分類される。一方、「汚す」は(6a)のように「壁にペンキを汚す」とは言えず、さらに、いくら名詞を入れ替えたり文脈を工夫したりしても「～ニ～ヲ汚す」とは言えないので、「壁塗り代換を起こさない動詞」に分類される。

ところが、上記(7a)を次のように誤解してしまう場合がある。

- (8)「壁塗り代換を起こす動詞」とは、どのような環境であれ必ず～ニ～ヲ形の文と～ヲ～デ形の文を成立させる動詞のことだ。

当たり前のことであるが、ある動詞がある格体制をとるからといって、常にその格体制の文が成立するわけではない。たとえば「行く」という動詞は「太郎がスーパーに行く」のように～ガ～ニという格体制をとるが、名詞を代えて「\*太郎が友達に行く」にすると不自然になる。しかしそのような例があるからといって「行く」は～ガ～ニという格体制をとらない」ということにはならないであろう（「壊れる」のような、そもそも～ガ～ニという格体制をとらない動詞と同じだ、と考える人はいないだろう）。この、半ば当然のことが、壁塗り代換の議論では理解されず、(8)のような誤解を生むことがある。そして「壁塗り代換を起こすとされている動詞なのに代換が成立しない例」を挙げて「汚す」のような、代換を起こさないとされている動詞と違いがない（「壁塗り代換を起こす動詞」と「壁塗り代換を起こさない動詞」にカテゴリー化することはできない）という主張が展開されることになる。「塗る」と「汚す」には(7a)と(7b)のような決定的な違いがあるのだが、これが顧みら

れなくなるのである。

ここで山田(2004)の主張②を見てみよう。冒頭の(2)に示したように「満たす」も壁塗り代換を起こすが、山田(2004)は次のような例を挙げて、「満たす」を使っても代換が成立しない場合があるとする。

(9)a.\*空きっ腹に水を満たす

b. 空きっ腹を水で満たす

(山田 2004:20(8)改)

そして、このことを根拠に、「代換を可能にする動詞をカテゴリー化すること自体に問題があるということを示唆するのではないだろうか(p.20)」と主張している。これはまさに、(8)の誤解に基づく主張だと考えられる。

(9)と(6)は～ニ～ヲ形の a 文が不自然になるという点で表面上は似ているが、不自然になる理由が全く異なる。(9a)が不自然になる理由は次のように考えられる。(9)で言わんとしているのは空腹状態から満腹状態になるという変化であると考えられるが、このことを表現するには、「水がどこに移動したか」を表す位置変化動詞文(すなわち～ニ～ヲ形)ではなく、「腹の状態がどうなったか」を表す状態変化動詞文(すなわち～ヲ～デ形)がふさわしい。よって(9a)の許容度が低いのだと考えられる<sup>7</sup>。ここで重要な点は、(9a)が不自然なのは「～ニ～ヲ満たす」が表す「位置変化」の意味と文脈が合わないためであり、「～ニ～ヲ満たす」という格体制自体が不自然なのではない、という点である(よって名詞を変えれば「グラスに水を満たす」のような自然な文ができ上がる)。これに対し(6a)の場合は、そもそも「どこどこニ 何々ヲ 汚す」という格体制が許されず、名詞をいくら入れ替えても、また文脈をいくら工夫しても自然な文にはならない。つまり「満たす」と「汚す」には(7a)と(7b)で述べた明らかな対立があるのであるが、山田(2004)では、「壁塗り代換を起こす動詞」を(8)のように誤解しているために、両者の違いが見えなくなり、「壁塗り代換を起こす動詞」というカテゴリー化はできないという主張に至ってしまったのだと考えられる<sup>8</sup>。

<sup>7</sup> 壁塗り代換の～ニ～ヲ形と～ヲ～デ形は意味が異なるので(前者は位置変化を表し後者は状態変化を表す)、相性の良い名詞や文脈に違いがあるのは自然なことである。

<sup>8</sup> 川野(2001)では壁塗り代換を起こす動詞の条件を考察した。これについて山田(2004)は、川野(2001)の提示している条件に(9)も合致しているはずなのに(9)では代換が成立しないとして、川野(2001)の提示した条件には不備があると批判している。しかしこの批判も(8)の誤解に基づくものである。川野(2001)

また山田(2004)は、「壁塗り代換を起こす動詞」というカテゴリー化はできないという主張のもう一つの根拠として、次の例を挙げている。

- (10) a. エッセーに自分の体験を書く  
      b. 自分の体験でエッセーを書く (山田 2004:19(5))  
(11) a. 危険地域にロープを張りめぐらす  
      b. 危険地域をロープで張りめぐらす (山田 2004:19(6))

山田(2004)は、(10)や(11)でも壁塗り代換（と言われている現象）と同じ格の交替が起こっているが、壁塗り代換を起こす動詞が持っているとして「移動変化動詞」という特徴を「書く」や「張りめぐらす」は持っていないと述べる。そして、「とすれば、代換を起こすという特性を持つとされる移動変化動詞はその価値を失うことになるのである。一見、格の交替のように見える二つの文は、それぞれにおいてたまたま同じ名詞句が用いられているためそのように見えるだけであって、代換を起こすとされる動詞群は存在しないのである（山田 2004:19）」と主張している（なお「移動変化動詞」は奥津 1981 の用語であり、本稿の用語では「移動」は「位置変化」、「変化」は「状態変化」に相当する）。

しかし山田(2004)のこの主張は成り立たないと思われる。「書く」や「張りめぐらす」が本当に「移動変化動詞」でないのかは検討を要するが、仮に移動変化動詞でないとしても（位置変化や状態変化を表さないとしても）、それは壁塗り代換とは別の原理で成立する現象があるということを示すにすぎず、壁塗り代換の存在を否定することにはならないからである。既に述べたように、本稿の見解では、壁塗り代換は同じ現実の出来事が位置変化としても状態変化としても類型化されるという原理で成立するが、これとは別の仕組みで成立する現象が他にあったとしても、壁塗り代換が存在しないことにはならないのである<sup>9</sup>。

---

で論じたのは(7a)の動詞と(7b)の動詞の違いであり、(7a)の動詞が全ての環境下で代換を起こすと主張したものではない。

なお川野(2009)では川野(1997)(2001)等を修正し、壁塗り代換を起こす動詞の条件を新たに考察した。しかし、(7a)の動詞と(7b)の動詞の違いを考察しているのだという点は一貫して変わっていない。

<sup>9</sup> (10)(11)に対する私見を述べておきたい。(10)は、(10b)のヲ格句(エッセー)が生産物であり通常の状態変化動詞文とは異なることから、壁塗り代換とは別の事例だと考えている。(11)については、本稿の筆者の内省では(11b)の許容度が低いものの、仮に自然な文であるとすれば、(11a)は位置変化動詞文、(11b)は状態変化動詞文であり、壁塗り代換であると考えている((11b)の許容度が低い理由も川野 2009 の枠組の中で説明可能と思われる。詳細は別稿で論じた

#### 4. 「離島の人々にテレビ番組を放送する」「離島の人々をテレビ番組で放送する」は壁塗り代換と同じか

続いて山田(2004)の主張③を検討したい。山田(2004)は、「壁にペンキを塗る」「壁をペンキで塗る」が代換とはいえないという主張の根拠として、次のような例を挙げている。

(12)a. 離島の人々にテレビ番組を放送する

b. 離島の人々をテレビ番組で放送する (山田 2004:19(4))

そして、(12)でも格の交替が認められ形式上は壁塗り代換と同じであるが、文意の違いが明らかなので代換とは認められないだろうとした上で、同様に程度の差こそあれ「壁にペンキを塗る」と「壁をペンキで塗る」にも文意の違いがあるのだから、(12)が代換と認められないのであれば「壁にペンキを塗る」「壁をペンキで塗る」も代換とはいえない、という議論を展開している(山田 2004:19)。

しかし、本当に壁塗り代換と(12)は同じで、文意の違いは程度差なのだろうか。ここでも「壁塗り代換」についての誤解があり、その誤解のもとに議論が展開されているように思われる。

壁塗り代換の特徴として最も重要な点は、格体制が交替するということ(すなわち、「壁にペンキを塗る」と「壁をペンキで塗る」は格体制の異なる文であるということ)である。このことは、次のようにするとよく分かる。「壁にペンキを塗る」にはニ格句が含まれ、「壁をペンキで塗る」にはデ格句が含まれるが、次の(13)が示すように、これらは一文中に共起することができない。

(13)\*壁にペンキで 何々を(例：机を、絵の具を…)塗る

これは、これらのニ格句とデ格句が、それぞれ別の格体制を構成する成分だからである。具体的には、ニ格句は位置変化動詞の格体制～ニ～ヲを構成する着点ニ格句であり、デ格句は状態変化動詞の格体制～ヲ～デを構成する材料デ格句である<sup>10</sup>。

---

い)。いずれにしても(10)(11)が「壁塗り代換」や「壁塗り代換を起こす動詞」の存在を否定する根拠にならないことは本文で述べた通りである。

<sup>10</sup> 壁塗り代換の～ヲ～デ形のデ格句は、ヲ格句の事物の変化後の状態を構成する事物(材料)であり、「壁を刷毛で塗る」のような道具デ格句とは異なる(道具デ格句は状態変化動詞文に限らず、様々な文に現れる)。このことについては Fukui et al. (1985)や川野(2001)を参照のこと。

(14)a. 着点ニ 対象ヲ 位置変化動詞  
壁に ペンキを 塗る

b. 対象ヲ 材料デ 状態変化動詞  
壁を ペンキで 塗る

このように、壁塗り代換の～ニ～ヲ形と～ヲ～デ形は別の格体制であり、「格体制が替わる」ということが、壁塗り代換という現象の大きな特徴になっている。

これに対し(12)はどうだろうか。山田(2004)は(12)でも壁塗り代換と同じ格の交替が認められるとしているが、よく観察してみると、(12)では格体制の交替が起こっていないことが分かる。(12a)にはニ格成分(離島の人々に)が、(12b)にはデ格成分(テレビ番組で)が含まれているが、これらは次の(15)が示すように一文中に共起できるからである<sup>11</sup>。

(15) テレビ番組で離島の人々に気象情報を放送した

つまり(12a)と(12b)は、「場所デ 相手ニ 対象ヲ 放送する」という同じ格体制の文なのであり<sup>12</sup>、この文のニ格句とヲ格句の部分抜き出したのが(12a)、デ格句とヲ格句の部分抜き出したのが(12b)なのである。

(16)	場所デ	相手ニ	対象ヲ	放送する	
		離島の人々に	テレビ番組を	放送する	…(12a)
	テレビ番組で		離島の人々を	放送する	…(12b)

そして、格体制は同じで使われている名詞が異なるため((12a)ではヲ格句に「テレビ番組」、(12b)ではヲ格句に「離島の人々」という名詞が使われている)、文意が変わるのだと考えられる。これは、たとえば「太郎が次郎を殴る」という文の名詞を変えて「太郎が三郎を殴る」にすると意味が変わるのと同じことである。

このようにみてくると、(12a)と(12b)の文意の違いと、壁塗り代換に

<sup>11</sup> なお、(12a)は筆者の内省では不自然に感じられ、「離島の人々に向けてテレビ番組を放送する」のように「向けて」を補った方が許容度が上がる。同様に(15)も「テレビ番組で離島の人々に向けて気象情報を放送した」の方が自然だと思われるが、ここでは山田(2004)の議論に合わせ、「放送する」がニ格成分をとるという前提で議論を進める。

<sup>12</sup> 厳密には、場所デ格句は格体制を構成する成分ではなく付加的成分だと考えられる。

おける文意の違いは、山田(2004)の言うような程度差ではなく、次元の異なるものだといえる。すなわち、(12a)と(12b)の文意の違いは同じ類型的意味の(=同じ格体制)の文で違う名詞が用いられたことによって出てくる違いであり、一方「壁にペンキを塗る」と「壁をペンキで塗る」の意味の違いは、同じ現実の出来事を位置変化として類型化しているか状態変化として類型化しているかという、類型的意味の違いである。前者は格体制の交替現象ではないが、後者は格体制の交替現象である。後者では、類型的意味(位置変化と状態変化)が交替し、それに伴って格体制(～ニ～ヲと～ヲ～デ)が交替する。

以上のように、(12)は格体制の交替現象ではなく、壁塗り代換とは別次元の事例である。しかし、山田(2004)では、壁塗り代換が格体制の交替現象であるという点が押さえられておらず、表面上「～ニ～ヲ」「～ヲ～デ」という形をしていれば全て壁塗り代換(と言われている現象)と同じと考えているのだろう。その結果、壁塗り代換とは別次元の(12)のような事例を根拠として壁塗り代換が代換であることを否定するという、不可解な主張に至っているのだと考えられる。

## 5. 壁塗り代換の問題は各構文の成立条件の問題に解消できるか

最後に主張④を検討する。山田(2004)は、「そもそも「一ニ一ヲ構文」と「一デーヲ構文」との成立条件はそれぞれ別次元のものであり、たまたま同じ名詞句を用いて成立した両構文を、次元を越えて突き合わせたものが代換なのである(p.21)」とした上で、「代換の問題は「一ニ一ヲ構文」と「一デーヲ構文」それぞれの成立条件の問題へと解消されるのである(p.21)」と述べている。

本稿で述べてきたように、壁塗り代換の～ニ～ヲ形は位置変化動詞文、～ヲ～デ形は状態変化動詞文であるから、「一ニ一ヲ構文」と「一デーヲ構文」との成立条件はそれぞれ別次元のもの」という点は本稿も同意見である。しかし本稿は、だからといって壁塗り代換の成立条件が各構文の成立条件の問題に解消されることにはならないと考える。

その理由は、同じ～ニ～ヲ形をとる動詞の中にも「塗る」のように～ヲ～デ形との交替を起こす動詞もあれば、「付ける」のように～ヲ～デ形との交替を起こさない動詞もあるからである。

- |                 |              |
|-----------------|--------------|
| (17)a.壁にペンキを塗る  | b.壁をペンキで塗る   |
| (18)a.壁にペンキを付ける | b.*壁をペンキで付ける |

このことは、～ニ～ヲ形の成立条件を記述するだけでは、なぜ「塗る」

は壁塗り代換を起こし「付ける」は壁塗り代換を起こさないのが説明できないことを示している。

同様に、～ヲ～デ形をとる動詞の中にも、「塗る」のように～ニ～ヲ形との交替を起こす動詞もあれば、「汚す」のように～ニ～ヲ形との交替を起こさない動詞もある。

- (19)a. 壁をペンキで塗る                      b. 壁にペンキを塗る  
(20)a. 壁をペンキで汚す                      b. \*壁にペンキを汚す

したがって～ヲ～デ形の成立条件を記述するだけでは、「塗る」が壁塗り代換を起こし「汚す」が壁塗り代換を起こさないことが説明できないことになる。

以上のように、実際の言語事実に照らしてみれば、壁塗り代換の問題は各構文の成立条件の問題へと解消されるという山田(2004)の見解が成り立たないことは明らかだと思われる<sup>13</sup>。

## 6. まとめ

本稿で述べたことを以下の(I)～(IV)にまとめる。

### (I) 山田(2004)の主張①について

- ・ 先行研究では「壁にペンキを塗る」と「壁をペンキで塗る」を同義としているという山田(2004)の理解には問題があり、実は、従来の研究でも同義とは考えていない。位置変化と状態変化という別の類型的意味を表す文だと考えられている。
- ・ 壁塗り代換は、現実世界の同じ出来事が言語において位置変化と状態変化の二通りに類型化されるという仕組みで成立する現象だと考えられる。「壁塗り代換は体系的な文法現象ではない」と主張するのであれば、上記の見方が成り立たないことを示す必要があるが、山田(2004)はこの点について何も議論していない。

### (II) 山田(2004)の主張②について

- ・ 山田(2004)は、壁塗り代換を起こすとされる動詞群は存在しないと主張しているが、これは、「壁塗り代換を起こす動詞とは、どのような環境であれ必ず～ニ～ヲ形と～ヲ～デ形の文を成立させる動詞のことだ」という誤解に基づく主張である。

---

<sup>13</sup> それでは壁塗り代換の成立条件を明らかにするには、どうすればよいのか。この問題については川野(2009)で論じているので、そちらを参照してほしい。

- ・「塗る」等の動詞が、名詞や文脈等の環境が適切でありさえすれば代換を起こすのに対し、「汚す」等の動詞は、名詞や文脈等の環境にかかわらず、そもそも代換を起こさない。この違いがすなわち、壁塗り代換を起こす動詞と起こさない動詞の違いである。「壁塗り代換を起こすとされる動詞群は存在しない」と主張するのであれば、「塗る」等の動詞と「汚す」等の動詞の間に上記の違いがあることをどのように考えるのか述べる必要があるが、山田(2004)はこの点について何も議論していない。
- ・壁塗り代換を起こす動詞というカテゴリー化ができないことの根拠として、山田(2004)は、移動変化（位置変化と状態変化）を表さない動詞でも壁塗り代換のような現象を起こす場合があることを挙げているが、仮に壁塗り代換とは別の原理で成立する現象があったとしても、壁塗り代換が存在しないことにはならない。

### (Ⅲ)山田(2004)の主張③について

「離島の人々にテレビ番組を放送する」「離島の人々をテレビ番組で放送する」は格体制の交替現象ではない。このような、壁塗り代換とは無関係の例文を挙げて代換ではないことを主張しても、「壁にペンキを塗る」「壁をペンキで塗る」等が代換でないことを示したことにはならない。

### (Ⅳ)山田(2004)の主張④について

～ニ～ヲ形をとる動詞の中にも、～ヲ～デ形との交替を起こす動詞もあれば、～ヲ～デ形との交替を起こさない動詞もある。また、～ヲ～デ形をとる動詞の中にも、～ニ～ヲ形との交替を起こす動詞もあれば、～ニ～ヲ形との交替を起こさない動詞もある。したがって、「壁塗り代換の問題は各構文の成立条件の問題に解消される」という山田(2004)の見解は成り立たない。

以上のように、山田(2004)の主張はいずれも、壁塗り代換が体系的な文法現象であることを否定する根拠にはならない。壁塗り代換が体系的な文法現象であるという従来の見解は、依然として覆らないのである。

もちろん、壁塗り代換をあくまでも偶然の産物だと主張することも不可能ではない。「塗る」等の動詞が～ニ～ヲ形と～ヲ～デ形の二種類の格体制をとるのも、よく似た意味の文になるのもたまたまであり、そうした現象が「塗る」等にはみられ「汚す」等にはみられないのもたまたまであるとして、全てを偶然で処理するという考え方である。

そうした考え方也不可能ではないことを認識した上で、それでも本稿は、壁塗り代換は体系的な文法現象であるという立場をとる。それは以



下のように考えるからである。

まず、既に述べてきたように、壁塗り代換は、偶然としか考えられないような現象ではなく、原理を見出すことが十分に可能な現象だからである。そうであるならば、「偶然」として片付けるのではなく、原理を追究する方が、研究として有意義であると思われる。

次に、他言語にも目を向けると、やはり壁塗り代換が偶然の産物であるとは考えにくいと思われるからである。既に知られているように、壁塗り代換は他言語にもみられるが（たとえば英語の **smear** は **smear paint onto the wall / smear the wall with paint** のように位置変化動詞の統語フレームと状態変化動詞の統語フレームの交替を起こす）、このことを考えあわせると、偶然とは考えにくいのではないか（「塗る」が～ニ～ヲ形と～ヲ～デ形の二つの格体制をとることも、二つの文がよく似た意味になることも偶然であり、その同じ偶然がたまたま英語の **smear** にも起こる、とは考えにくい）。やはり、この現象の背後に何らかの仕組みがあると考えるのが自然だと思われる。もちろん、「他言語に同じ現象があることも含めて全て偶然だ」と言うて言えないこともないだろう。しかし、あえて偶然とみなして原理を追究しない立場にどのような意義やメリットがあるのか、本稿の筆者には分からない。

## 参考文献

- 井島正博(2005)「変化動詞文の格構造」『日本語学論集』創刊号、東京大学大学院人文社会系研究科国語研究室
- 奥田靖雄(1976)「言語の単位としての連語」教育科学研究会国語部会(編)『教育国語』45、麥書房
- 奥津敬一郎(1981)「移動変化動詞文—いわゆる **spray paint hypallage** について—」『国語学』127、国語学会
- 川野靖子(1997)「位置変化動詞と状態変化動詞の接点—いわゆる「壁塗り代換」を中心に—」『筑波日本語研究』2
- 川野靖子(2001)「いわゆる「壁塗り代換」における動詞の条件」『筑波日本語研究』6
- 川野靖子(2002)「自動詞文における二種類の代換現象と所有関係—「N<sub>1</sub> ガ N<sub>2</sub> デ～」と「N<sub>1</sub> ガ N<sub>2</sub> ニ～」の違いを中心に—」『日本語文法』2-1、日本語文法学会
- 川野靖子(2004)「「桜の葉に餅をくるむ」と「餅を桜の葉でくるむ」—壁塗り代換との関連性—」『香椎潟』50、福岡女子大学国文学会
- 川野靖子(2006)「現代日本語における位置変化構文と状態変化構文の交替現象

- 一格成分の対応の仕方―』『日本語の研究』2・1, 日本語学会
- 川野靖子(2009)「壁塗り代換を起こす動詞と起こさない動詞―交替の可否を決定する意味階層の存在―」『日本語の研究』5・4, 日本語学会
- 川野靖子(2013)「現代日本語の動詞「詰める」「覆う」の分析―格体制の交替の観点から―」『埼玉大学紀要(教養学部)』48-2
- 岸本秀樹(2001)「壁塗り構文」影山太郎(編)『日英対照 動詞の意味と構文』大修館書店
- 定延利之(1993)「深層格が反映すべき意味の確定にむけて―対称関係・対称性を利用して―」仁田義雄(編)『日本語の格をめぐって』くろしお出版
- 仁田義雄(1997)『日本語文法研究序説―日本語の記述文法を目指して―』くろしお出版
- 山田昌裕(2004)「壁塗り代換(spray paint hypallage)―文法現象の存在をめぐって―」『表現研究』79, 表現学会
- Fukui, Naoki, Shigeru Miyagawa and Carol Tenny. 1985. Verb classes in English and Japanese: A case study in the interaction of syntax, morphology and semantics. *Lexicon project working papers* 3. Cambridge, MA: Center for Cognitive Science, MIT.
- Iwata, Seiji 2008. *Locative alternation: A lexical-constructional approach*. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins Publishing Company.
- Kageyama, Taro. 1980. The role of thematic relations in the *spray paint* hypallage. *Papers in Japanese linguistics* 7.

## 付記

本稿は、科学研究費補助金(基盤 C, 課題番号 26370527)による研究成果の一部である。

(埼玉大学人文社会科学研究科准教授)